

氏名	高橋洋平
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	博英甲 第13号
学位授与の日付	2016年3月26日
学位授与の用件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	On Relativization: A DP Movement Approach 関係節化について: DP 移動分析案
論文審査委員	主査教授 McCready, E. S. Jr. 副査教授 武内信一 副査 青山学院大学文学部元教授 外池滋生 副査 東北学院大学教授 大石正幸

論文の内容の要旨

高橋洋平

本論文では、現行のミニマリスト・プログラムの理論枠組みから、関係節化について論じている。関係節化は生成文法理論の初期の頃から関心を集めていたトピックの一つであるが、未だに決定的な分析の確立には至っていない。Chomsky (2008) では、関係節化(特に明記されていないので、おそらく通言語学的にも標準的な主要部外在型関係節を指すと思われる。)は、それが持つ特性が広範であるために単一の分析では全ての特性が説明しきれないため、主要部繰り上げ分析と主要部基底生成分析の二つの分析が存在しなければならない、と言及されている。また、このChomskyの見解に従うような形で、英語以外の経験的事実を提示し、Chomskyと同様の結論を支持する研究者も多い。しかし一方で、ミニマリスト・プログラムを背景としながら、普遍文法に備わる演算手法に基づき、あるいは独自にアルゴリズムを組み立てそれを利用した、関係節化についての統一的分析の確立を試みるアプローチも存在している。文法の負荷を最小限にするというミニマリスト・プログラムの至上命題の元では当然

このようなアプローチが支持されるわけだが、それにもかかわらず、前述の通り、決定的な分析と呼べるものが存在していないのが現状である。

このような現状を踏まえた上で、本論文では Tonoike (2008) で提案された関係節化の DP 移動分析を採用して、統一的な派生案を提示する。関係節化を取り上げる際に検討しなければならない問題群を整理し、そして先行研究が持つ問題点を指摘した上で、DP 移動分析の元ではそれらがどのように説明されるのかを論じてゆく。また、日英語以外の個別の言語の関係節と周縁的な関係節表現についても取り上げ、これらが当該分析の元で自然な形で説明されることについて論じてゆく。

第一章は本論文の目的について述べている。本論文の目的は概ね上記で示した通りである。本論文が想定するミニマリスト・プログラムの理論枠組みは基本的に Chomsky (1995, 2000, 2001, 2004, 2008) の一連の論考の中で構築されたものであるが、いくつかの重要な演算操作、順守しなければならない規範については Tonoike (2008) で提示された一連の理論を想定している。それは顕在統語論仮説 (Overt Syntax Hypothesis)、側方移動 (Sideward Movement)、元位置演算子変項仮説 (In-situ Operator-Variable Hypothesis)、代名詞化の併合理論 (Merge Theory of Pronominalization) であり、これらの概要についても本章で言及している。

第二章は、主要部外在型関係節に関する統語論の分野で提案されてきた先行研究のまとめと DP 移動分析の導入である。関係節化を捉える際に考慮しなければならない経験的・理論的問題を先行研究の概観から明確にした上で、DP 移動分析がこれらの問題をどのように対処するかについて論じている。いくつかの問題についてはすでに Tonoike (2008) で取り上げられているが、残された問題を最も単純な形で説明するための手法として、本論文では制限子 (restriction) の遅発併合 (late merge) という可能性を DP 移動分析に提案する。この意図は、従来の WH 移動を適用する際に、演算子単独を関係節中から移動させ、制限子を主節内で後から併合させるというオプションを設けることにより、その制限子のコピーを関係節内に残さないという点にある。このオプションにより、イディオム読み可否などを単一の分析の元で説明することができるようになる。

第三章では、アイルランド語とゲール語の関係節化について取り上げている。これらの言語の関係節化で捉えなければならない事実は McCloskey (2001, 2003) などで relative particle と称される構成素の屈折である。前述の McCloskey はアイルランド語の、そして Adger and Ramchand (2004) はゲール語の relative particle を補

文標識として分析しているが、いずれの分析もその屈折を捉えるために理論的に余計な負荷のかかる規定を立てている。そこで本論文では、既に Tonoike (2008) で方向性が述べられている relative particle を決定詞とみなすアプローチの精緻化を試み、relative particle の屈折をできるだけ少ない仮定を立てることで捉えようとしている。本章の結論は、relative particle は CP 指定部に残された決定詞のコピーがスペルアウトしたものであり、表層的な形態の違いは述部形成が通常の WH 移動により遂行されたか、あるいは側方移動によって遂行されたかの相違に還元されるという主旨である。

第四章では、いわゆる主要部内在型関係節を取り上げ、その統語論を Takahashi (2010, 2012) で提案した決定詞移動分析で導出しようと試みている。議論の大部分は日本語の主要部内在型関係節についてであるが、ラコタ語、タガログ語、ゲル語の当該構文に言及している。内在型は標準的な外在型には観察されない特性があるというのが標準的な見解であるが、これらの特性を慎重に観察すると、その妥当性が疑わしいものが幾つか存在しているため、両タイプの関係節間の相違は一般的に考えられているよりも実際は小さいと本論では主張する。また本章では内在型の類型論上の問題にも踏み込んでおり、結論として新たな仮説を提案している。それは、内在型は顕在的な決定詞を持つ言語の中に存在する、というものであり、この種の仮説は筆者が把握する限りこれまで提案されていない。

第五章は、空所欠落関係節について取り上げている。空所欠落関係節は日本語、中国語、韓国語などに観察される周縁的な関係節構文であり、英語には存在しない。これを換言すると、空所欠落関係節を持つ言語は英語に比べて被修飾名詞と修飾節との修飾関係が緩いということになり、これまでの統語論研究はこの事実を無視してきたわけではないが、あくまでも最低限の言及に留めており、精緻な分析を提示するようなことはなされてこなかった。本分析では、Tsai (1997) で提案されたイベント項を用いたアプローチに着想を得て、イベント項を標的とした移動分析を提案している。なお本章では、空所欠落関係節の中でも因果関係をあらかず空所欠落関係節に議論の対象を限定している。当然のことながら、全てのタイプの空所欠落関係節がこの移動分析の元で画一的に説明されれば望ましいが、空所欠落関係節の中でもイベント項を仮定するアプローチが妥当ではないと考えられるものがあると判断したため、考察の対象を限定した。まだまだ課題の多い構文である。

審査の結果の要旨

高橋洋平氏提出の学位申請論文「関係節について—DP 移動アプローチ」は A 4 で本文220ページ（参考文献含む）の英文論文で、5章からなっている。

論文の主たる目的は A DP Movement Analysis of Relativization（関係詞化の DP 移動分析）と題する Tonoike（2008）の論文を始めとする一連の研究で提案された理論的枠組みが、世界の言語に見られる関係詞化の現象を取り扱うのに有効であることを主に二つの論点において検証することである。一つは、関係節の形成に当たっては決定詞（Determiner）の移動が関与していて、いわゆる関係代名詞は先行詞決定詞句（antecedent DP）の主要部の決定詞のコピーであることを検証することである。これはドイツ語の *der Junge, den wir kennen*（我々が知っている少年）で、関係代名詞とされる *den* は、男性単数対格の冠詞（すなわち、決定詞）と同形であるという事実が如実に現れている。

もう一つは、日本語に見られる「リンゴが皿の上にあるのを食べた」のような主部（＝先行詞）内在型関係節（Head-Internal Relative Clause）や「魚が焼けるにおい」のように、主部＝先行詞を関係節の内部に戻して解釈できない（いわゆる外の関係の）関係節の扱いにまで DP 移動分析が適用できるかを検証することである。

第1章 本論の目標（Goals of This Thesis）

ここでは、「そうでないと考えるべき強力な証拠がなければ、言語は画一的であると想定すべきであり、言語の変異は容易に発見できる発話における特性に限られる」という Chomsky（2001）の画一性の原理（the Uniformity Principle）が正しいとすれば、外池の DP 移動分析の提案も、それが正しいければ、全ての言語に適用可能でなければならないということを出発点として、これを検証するという目標設定を行い、移動のコピー理論（Copy Theory of Movement）、側方移動（Sideward Movement）、顕在的統語論仮説（Overt Syntax Hypothesis）、元位置演算子-変項構造（In-situ Operator Variable Construction）仮説、など前提とする理論上の枠組みを論じている。

第2章 主部外在型関係節の諸分析の概観と関係節の DP 移動分析の紹介（An Overview of Analyses on Head-External Relative Clauses and an Introduction to the DP Movement Analysis of Relativization）

ここでは、Alexiadou et al (2000) を出発点として、関係節に関する先行研究を広範囲に、ほぼ網羅的に取り上げて、外置 (Extrapolation)、決定詞と名詞の間の形態論的一致 (Morphological agreement between D and N)、再構築 (Reconstruction) など関係節の分析が処理できなければならない8つの課題を同定する。その上で、Tonoike (2008) では取り上げていない、Henderson (2007) の側方移動分析 (Sideward Movement Analysis)、Donati and Checchetto (2011) の名詞繰り上げ分析 (Noun Raising Analysis)、Murasugi (2000a, b) の反対称分析 (Antisymmetric Analysis)、そして Szczegielniak (2004) の折衷分析 (Eclectic Account) を取りあげて、上記課題が適切に処理できていないことを指摘し、現存する提案の中で、Tonoike の DP 移動分析が正しい方向にあることを確認する。

この章で特筆すべきことは、DP 移動分析の実施方法 (execution) として、関係節内には D だけがあって、NP は最後に併合される (late Merge) という可能性を指摘していることである。これが後の主部内在型関係節との違いを扱う上で重要になる。

第3章 ケルト語における関係詞化 (Relativization in Celtic Languages)

ここでは、ケルト語族の二つとして現代アイルランド語／スコットランドゲール語についての関係詞化が生じた場合には通常の補文標識 = 接続詞の *gur/gun* が現れず、代わりに *a* が現れる事実は補文標識が取り出された関係代名詞と一致 (WH-Agreement) した結果であるとする McCloskey (2001, 2002) / Adger and Ramchand (2005) の分析を取り上げて、そのような一致が起こっていると考える必要はなく、DP が関係節から取り出されたときに音を持たない関係節補文標識の指定部に一旦立ち寄って、そこに決定詞 *an* の弱化されたコピー (reduced copy) *a* を残したものであるとすれば、DP 分析の枠組みに完全に合致した形で分析できることを指摘していて、DP 移動分析の妥当性について重要な根拠を提供している。

第4章 主部内在型関係節 (Head-Internal Relative Clauses (HIRCs))

ここでは、日本語の「リンゴが皿の上にあるのを食べた」のように先行詞が関係切内に残っていると見られる関係節について、Kuroda (1974) 以降の様々な分析を比較検討して、HIRCs の特徴を洗い出した上で、それらが DP 移動分析の延長線上で適切に取り扱えることを示している。

まず、日本語では、格助詞が決定詞であるとする立場から出発する。その立場から

すると「皿の上にあるリンゴを食べた」という主部外在型関係節（Head-External Relative Clauses (HERCs)）では、「リンゴが皿の上にある」の「リンゴが」が DP で、格助詞「が」が D であるが、これが取り出されると「皿の上にある」リンゴ D となる。D はまだ、形が決まっていない格助詞＝決定詞である。これが、「食べる」という動詞の目的語になったばあいは、D は「を」として実現される。

DP 移動分析で重要なことは D が移動されるといことであるから、DP が移動される通常の場合の他に、日本語では、D のコピーだけを移動で取り出す事ができると仮定すると、「リンゴが皿の上にあるの D」を作ることができる。これが「食べる」の目的語として使われた場合は、D は「を」として実現されるため、「リンゴが皿の上にあるのを食べた」が得られる。

DP 移動分析の一つの可能性として D だけの移動がありうるとしたこの分析は、主部内在型関係節の分析として極めて有力であると思われる。

第 5 章 空所欠落関係節 (Gapless Relatives)

ここでは、「魚が焦げるにおい」のような英語に対応する関係節表現を持たない表現を取りあげ、これが関係節として分析できるかどうかを検討している。空所欠落関係節の問題は、「魚が焦げる」の中に、「においを」戻して、通常の文にできないという特徴があり、その意味で、DP 移動分析にとって扱いが難しい。この問題に対して、「魚が焦げるにおい」が「魚が焦げるときのにおい」と言い換えが可能であることを元に、音形のない「とき」を主部として関係詞化が中で起こっているとして、DP 移動分析の射程内であるとする提案を行っており、一つの解決方法として興味深い。

以上述べたことを総合的に評価して、この論文が、高橋洋平氏に博士号を授与するに相応しいものであると、審査員一同判断する。

2015年1月8日

主 査	青山学院大学文学部教授 Eric McCready
副 査	青山学院大学文学部教授 武 内 信 一

副 查 青山学院大学文学部元教授
外 池 滋 生
副 查 東北学院大学教授
大 石 正 幸